



英虞湾の真珠養殖場

真珠筏が浮かぶ海

アコヤ真珠が養殖されている伊勢志摩国立公園は、1946年(昭和21年)に戦後初の国立公園として指定されました。三重県中央部の志摩半島一帯を区域とし、およそ東西50km、南北40kmにわたっています。沿岸部は複雑に入り組んだリアス式海岸で、英虞湾・五ヶ所湾などの深い入り江と大小多数の島々が繊細で優美な景観を見せています。これら自然景観に加え、真珠の養殖筏、サザエやアワビなどをとる海女の姿、伊勢神宮など悠久の歴史を有する人文的景観が彩りを添え、自然の造った美しさと、人間が創った歴史文化の融合した景観が見られます。



アコヤ貝は流されないよう筏に吊り下げて育てられる



貝の体内に核を入れる施術作業

その美しい海を舞台に、真珠養殖はその過程に応じていくつかの条件の異なる漁場が必要となります。核入れ後、養生を行なったアコヤ貝が体内の真珠を育てる大事な養

成期は、水温が13℃以上でプランクトンが豊富であり、潮の流れがよく、しかも波が穏やかであることが必要です。またこの時期は、貝の表面に付着したフジツボなどを取り除く「貝そうじ」を頻繁に行う必要がある他、水温・赤潮などに細心の注意を払いながら管理しなければなりません。志摩で生まれ育った真珠養殖技術は、現在ではさまざまな国と地域に伝播し、各地の産業発展に寄与しています。

写真・資料提供

志摩市
志摩市歴史民俗資料館
全国真珠養殖漁業協同組合連合会
三重県真珠養殖連絡協議会
(有)加藤商会
(株)御木本真珠島
覚田真珠(株)
(有)P・J中村インターナショナル



三重県真珠振興協議会

協賛団体

全国真珠養殖漁業協同組合連合会
三重県真珠養殖連絡協議会
パールオークションみえ協同組合
伊勢真珠協同組合
志摩真珠協同組合
日本真珠装身具協同組合
日本真珠仲買協同組合

〒516-0037 三重県伊勢市岩淵1-3-19-2F
Tel: 0596-28-4140 Fax: 0596-27-0414
E-mail: m-sinkyo@amigo2.ne.jp

真珠養殖発祥の地 三重県の真珠





大正時代の養殖作業風景

人類の偉業、養殖真珠の誕生

他の宝石とちがいで、研磨やカットの必要のない真珠は“世界最古の宝石”と呼ばれています。その存在は聖書をはじめ、世界各地の古い文献にも登場します。しかしながら、真珠が時の権力者たちに愛される一方で、その収集にはインドや南米にて多大な犠牲が払われてきた歴史もあります。真珠養殖技術の開発は、このような非人道的な採集方法を衰退させる一方で、誰もが真珠を楽しめる普遍性をもたらした功績があります。



真珠養殖成功の第一歩、半円真珠



養殖真珠生みの親
左:御木本幸吉 上:見瀬辰平 下:西川藤吉

三重県鳥羽に生まれた御木本幸吉は、海女が採取していた天然真珠に興味を持ち、「何とか人工的に養殖できないだろうか?」と考えました。志摩の英虞湾では、1888年(明治21年)頃から御木本や小川小太郎により真珠を育むアコヤ貝の増殖が始まりました。5年にわたる試行錯誤のすえ、1893年(明治26年)に鳥羽の相島で数個の殻付真珠の生産に成功。貝殻の内側に貼りついた珠を採取するため半球形でしたが、真珠養殖の大きな一歩となりました。

1907年(明治40年)には見瀬辰平・西川藤吉らが真円真珠の養殖方法の特許を申請し、現在の真珠養殖の基本的な技術が確立されました。その時から、世界中で愛される「丸い真珠」の生産が本格化したのです。



日本全国のバイヤーが一堂に集まる浜揚げ珠の入札会

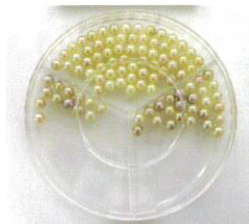
伊勢・志摩・鳥羽から世界へ

養殖産業の発展とともに、伊勢志摩では他の地区にはない真珠産業構造が発達しました。それは養殖・加工から輸出業まで網羅した、他の地域では見られない構造となっており、養殖真珠発祥の地である伝統とプライドを持った真珠関連業者が多数存在しています。



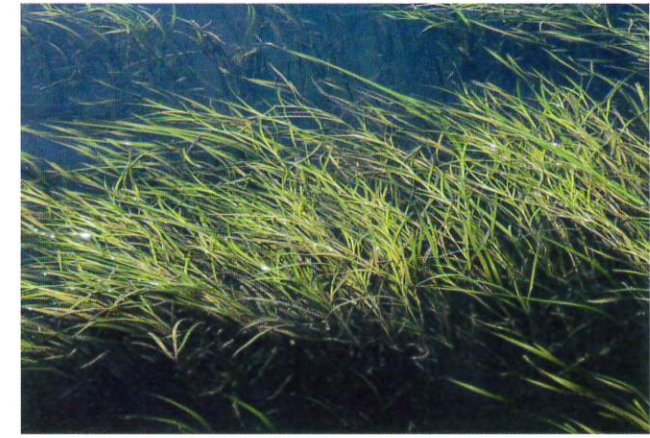
自然光で真珠の品質を見定める

2014年現在、三重県内の養殖業者は約350社で、生産量は1,164貫(約4,365kg)。真珠光沢が最大となる冬場にアコヤ真珠は浜揚げされ、各地区で入札が行われます。毎年12月には、県下の養殖業者が参加する真珠の品質評価会が開催され、各業者が無差別に100個の貝から取り出した真珠の品質(球形率・色・マキ・テリ・傷等)を競い合い、優勝者には県知事賞が贈呈されるなど、養殖業者間の切磋琢磨の機会を設けています。加工や流通業者は約150社に上ると言われています。各組合で製品入札会が毎月開催され、他の地域以上に活発な取引が行われています。プロによって吟味された真珠が、国内だけではなく海外市場へも送り出され、世界のアコヤ真珠の市場価格がこの地で決められていると言っても過言ではありません。



品評会で受賞した真珠

また行政も、国立水産総合研究センターや三重県水産研究所をこの地域に設置して、日々のデータ収集や養殖業の技術開発を支援しています。



さまざまな生き物が集まるアマモの生息場所

自然を敬う気持ち

古代から「御食つ国」と呼ばれてきたように、英虞湾、的矢湾、さらに太平洋と海に囲まれた志摩市は、海からの豊かな水産物に恵まれてきました。その自然を次世代に手渡すために、「新しい里海創生によるまちづくり」を展開しています。自然との調和をめざして、森林の管理・工場排水の規制・生活排水対策・干潟や藻場の再生や保全など、海の水質改善を進めるとともに多様な生物との共存共栄に取り組んでいます。さらに、海水浴場の整備など観光業への配慮や環境学習など、包括的な市民参加型のまちづくりを進めています。この事業は世界にも紹介されており、「SATOUMI」という言葉がそのまま使われるなど、高い評価を受けています。



市民も一体となって干潟観察会に参加



毎年行われる真珠貝供養祭

志摩市阿児町賢島の円山公園には、真珠を生み出すために命を落とした真珠貝を供養するため、1957年(昭和32年)に真珠貝供養塔が建立されています。毎年10月22日には、全国から真珠の養殖や流通に関わる人々がここに集まり、真珠貝の供養祭が執り行われています。真珠は真珠貝の体内でつくられる宝石ですが、真珠を取り出すことで貝はその命を終えることになります。真珠の美しさの影に、真珠貝の命があることを忘れてはいけません。